

佳作

バナナの沈黙

——加速社会に抗う哲学的抵抗

坂^{さか}綾^{あや}高^{たか}

(山梨県／私立山梨学院高等学校二年)

1章 はじめに

バナナは美しい。黄金色の外皮と有機的な曲線は、私たちの視線を惹きつける。しかし、その美しさは自然の偶然ではなく、人間の操作によって規定された時間の産物である。市場に並ぶ多くのバナナは、エチレンガスで人工的に熟される。急速に熟した果実は、細胞の分解が急激に進み、すぐに柔らかくなる。香りや味わいの深みにおいても自然熟成には及ばない。そして腐敗の進行はさらに加速していく。

この姿は、現代社会の縮図ではないだろうか。

技術革新や情報の高速化に私たちは魅

了される一方で、身体的、精神的、環境的側面が与える影響は見過ごされがちである。啓蒙思想以降、「加速こそ善」とする価値観が社会的に制度化され、産業革命からAI時代に至るまで、速度と効率化は進歩の象徴として絶対視されてきた。しかし、その結果として、精神的疲弊、教育の画一化、環境破壊など、深刻な副作用が顕在化している。したがって、私たちはこの加速社会の構造そのものを問い直す必要がある。速度だけを追求する社会は、私たちの生活の質や人間性を犠牲にしているのである。

バナナが本来の甘味を獲得するには、熟成の「間」、すなわち時間の経過が不可欠だ。この洞察は、人間社会にも適用できる。立

ち止まり、熟考し、感覚を研ぎ澄ます時間こそが、持続可能な価値の生成に寄与する。本稿では、加速社会の構造とその影響を分析し、「間」の倫理的、社会的な価値を再評価し、未来の国際社会に必要な倫理の再設計を試みる。

2章 加速の歴史とその代償

一八世紀の啓蒙思想において、「進歩」という概念は哲学的に確固たる地位を獲得した。当時、宗教的権威が揺らぎ、人間の理性が尊重される世界へと大きく舵が切られた。哲学者イマヌエル・カントは、『永遠平和のために』の中で、歴史は理性の完成に向かうとする目的論的歴史観を提示している。彼は、「人類の進歩を自然の必然と捉え、遅滞は停滞であり、悪である」と論じた(Cant, 1985, p. 49)。この思想は、近代における市民の価値観の形成において、重要な思想的基盤となった。そして、一八世紀から一九世紀にかけて起きた産業革命によって、この思想は、物理的な速度に転化した。蒸気機関は、人間の肉体をも凌駕し、工場制生産は、時間を均質化させた。歴史学者E・P・トンプソンは著書『イングランド労働者階級の形成』にて、「産

業革命によって時間の規律が生まれ、労働者が機械の歯車と同じリズムで動かされる新たな支配構造が形成された」と論じている(トンブソン・2003, p.465)。この時点で、「速く・大量に・効率的に」が社会的善として確立されたのである。人間が機械の時計を生きるようになり、機械の速度に同調をせざるを得なくなった。速度が社会の中心となったのだ。

さらに、二〇世紀後半、インターネットによる情報革命は速度の概念を瞬間的なレベルまで拡張した。インターネットは距離と時間の壁を事実上消滅させ、国際社会において資本主義を加速させた。経済協力開発機構(OECD)の報告書『OECD Compendium of Productivity Indicators 2025』によれば、多くの加盟国で労働者一人あたりの生産性は年々上昇し続けているとされている(OECD, 2025, p.12-36)。しかし同時に、立ち止まらない加速社会が出現したのは、紛れもない事実だ。

やがて二一世紀、ついにAIが出現し速度の極限を現実にした。社会のあらゆる判断を秒速で下す時代が訪れたのだ。ミリ秒単位で株取引が完了し、医療診断や自動翻訳も瞬時に行われる。だが、その代償とし

て「速さ」が価値の唯一の指標となりつつあり、人間の判断や経験は軽視される危険性が生じている。もちろん、「加速」は、国際社会に多くの恩恵をもたらした。医療技術の進歩は寿命を伸ばし、多くの命を救済し、経済的効率は生産性を向上させた。しかし、過労死、精神的健康の悪化、環境破壊といった副作用は無視できない。世界保健機関(WHO)の二〇二一年の報告書にて長時間労働による過労死を年間約七十四万人と推計し、過労死問題を深刻視している。米国心理学会(APA)は、二〇二二年、SNS依存と比較からくる若年層の自己肯定感低下が心理的健康を蝕んでいると警告した。また、国連環境計画(UNEP)は『The Global E-waste Monitor 2020』では、「世界の電子廃棄物が年間五〇〇万トンを超え、先進国で生じた安全基準を満たさない電子廃棄物が発展途上国に移され、現地の労働者は健康を害しながら解体作業を強いられている事実を明らかにしている。加速の影響は時代や国境を越えた国際社会の共通課題となったのである。

産業革命以降、資本主義は速度と効率を絶対的価値として発展してきた。「より速く、より多く」は、経済活動の合言葉とな

り、「加速」は無条件に善とされたきた。その結果、資源の過剰消費や環境破壊、経済格差の拡大といった副作用が顕著になっている。さらに、情報化社会では、判断や意思決定の時間さえ短縮され、「考える間」が失われつつある。もはや、人間の考えるという行為さえ、必要とされなくなる。人間が本来持つ熟慮や感受性を軽視するこの傾向は、持続可能な社会形成に対する、潜在的なリスクになるだろう。

この現実を踏まえれば、「加速こそ善」の概念が、近い未来崩壊していくのは明白だ。現代社会は効率や利益のみならず、持続可能性と心の豊かさを軸にした倫理と制度の再設計を求められているのである。

そこで本章では、「加速」の対極に位置する、「間」という概念に注目し、その哲学的意義と社会的可能性を探っていきたい。

3章 「間」の哲学と倫理的遅延主義

「間」は文化を越えて存在し、加速社会においてしばしば見失われがちな「深さ」や「熟成」の価値を回復する鍵となる。日本文化には、「間(ま)」という独自の概念がある。能楽の間、茶道の所作における静寂、建築における余白、そして俳句におけ

る「切れ字」や、禪における沈黙——いずれも単なる空白ではなく、意味や感情を内包する時間的・空間的構造であり、行動の選択における倫理的判断を含む時間である。「間」は、物事の間に流れる沈黙や余韻を尊重し、その中に意味を見出す態度を示す。この加速の対極に位置する「間」は、単なる遅延や停滞ではない。それは物事の熟成や思索を可能にする時間的余白であり、外的な速度に迎合せず自らの歩調を保つための能動的選択である。このような態度は、現代社会において極めて重要な倫理的立場にあると考える。私はこれを「倫理的遅延主義」と定義したい。すなわち「進まないことの倫理」である。これは、加速を至上とする社会構造に抗し、あえて立ち止まり、熟考し、自らの速度で生きること肯定する倫理的態度を示す。「倫理的遅延主義」は、「間」の哲学を現代社会における倫理の実践へと翻訳したものであると同時に、沈黙や余白の価値を、個人の生き方において選び取る姿勢である。これは単なる文化的美学に留まらず、加速社会に対する思想的な抵抗であり、持続可能な生活を実現させる倫理的選択である。

この思想は、東洋に限らず、西洋哲学に

も類例が存在する。ハイデッガーは『存在と時間(上)』において、「存在の問い」を急がずに問い続けることの重要性を説いている。彼にとって「間(Zwischen)」とは、「存在と存在者のあいだにある意味生成の場であり、時間性を通じて存在の理解が深まる」と論じている(ハイデッガー、1994, pp.45-80)。また、ワイトゲンシュタインは『哲学探究』において、「言葉の意味は文脈に依存して立ち現れるとし、沈黙や間にこそ哲学的洞察が宿る」ことを示唆している(ワイトゲンシュタイン、2020, pp.89-95)。

東洋では、道元が『正法眼蔵 坐禅儀』において、「只管打坐」すなわち目的や成果を求めず、ただ坐ることそのものに価値を見出す姿勢を説いている。彼は、「坐禅とは悟りの手段ではなく、それ自身が仏法の実践であり、身心脱落の境地に至るための唯一の道である」と述べている(道元、1283, pp.12-15)。

目的達成のためではなく、「今ここで坐る」という行為そのものに価値を見出す道元思想は、まさに「倫理的遅延主義」の実践である。このように「倫理的遅延主義」は西洋、東洋を通じて、古くから実践されてきたことであり、この態度が多くの人々

に恩恵を与えたことを歴史が教えてくれている。次章では、この「間」の概念と個人としての生き方の「倫理的遅延主義」を、社会制度や国際社会においてどのように組み込むことができるか探ってみたい。

4章 社会制度における「間」の応用…共鳴資本

4・1 共鳴資本の理論的背景

社会学者ハルトムート・ローザは、著書『Resonance: A Sociology of Our Relationship to the World』において、「共鳴とは単なる共感や同調ではなく、他者や世界とのあいだで相互に響き合い、自己が変容するような関係性である」と定義している。彼はこれを「世界との生きた関係」と呼び、効率や成果では測れない、持続的な変化をもたらす力として位置づけている(Reza 2019, pp.45-50)。たとえば、友人との対話で予期せぬ気づきを得る瞬間、自然の中で心が震える体験、教師とのやり取りの中で新しい学びが生まれる場面——これらはいずれも共鳴の具体例だ。本稿では、このローザの社会理論における「共鳴(Resonance)」の考えを基盤に、前章で述べた「倫理的遅延主義」を個人の生き方にと

どめず、社会制度に応用する枠組みとして、「共鳴資本」として提唱したい。私の提唱する「共鳴資本」とは、効率や数値には表れない人間同士の信頼や感謝、共感といった価値を制度的に評価する仕組みである。言い換えれば、「数字に表れない豊かさ」を社会の基盤に据える新しい資本概念である。ここで改めて整理すると、「間」は哲学的基盤、「倫理的遅延主義」はその実践的態度、そして「共鳴資本」は制度的応用であり、この三者は相互補完的につながっている（図表1）。加速社会において見失われがちな「数字に表れない豊かさ」を回復するための思想的支柱となる。

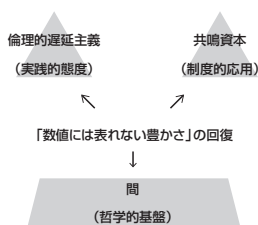
4・2 教育、福祉・医療、経済における「共鳴資本」の兆し

次に国際社会に現れている「共鳴資本」としての兆しを、教育、福祉・医療、経済の各領域で事例を挙げてみたい。まず教育分野では、「加速」の影響を大きく受けている。しかし、そこに逆行したのが一九九八年の学習指導要領改訂を経て二〇〇二年より本格的に実施された「ゆとり教育」だ。詰め込み学習を減らして、授業時間を短縮した日本の教育改革である。実は、この教

育指針のあと、OECDの生徒の学習到達度調査（PISA）や国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）では、日本の学力が一時的に低下したと発表し、二〇一一年に日本はいち早くゆとり教育から撤退した。しかし、同時期に神戸親和女子大学（現・神戸親和大学）によって実施された調査によると、ゆとり教育が学生の思考力や学習意欲によい効果を与えたと報告があり、学習内容の削減により、深い思考や自己表現の機会が増えたとする学生の声が多く紹介された（間・泰尚、2023、pp.283-286）。効率的成果のみに焦点を当てるのではなく、熟考や創造的学びを尊重した結果、目には見えない成長があることを示唆しているのだ。これは「共鳴資本」の理念と重なる。

福祉や医療の分野でも、「立ち止まる」ことの価値は見直されつつある。オランダはOECD加盟国の中で公的社会支出が高い国の一つである。二〇一五年のデータでは、GDPの約二二・三％を社会保障に充てており、これはOECD平均の約二一・〇％を上回っている。そのオランダの高齢者施設では、日常の会話や沈黙を大切に、雑談の質を数値化し、ケア評価に反映させる「経験的質指標」を導入している。効率

【図表1】 「間」「倫理的遅延主義」「共鳴資本」の関係性



化よりも「間」を重視する姿勢は、福祉制度における共鳴資本の萌芽である。その成果は、二〇二四年の「World Happiness Report（世界幸福度報告書）」で、オランダが六位に位置したという事実を表れている。

経済分野では、「加速」の象徴ともいえる資本主義の中で、効率化の進展が人間的要素を希薄化させるリスクを示す事例がある。世界的コーヒーショップのスターバックスは、「ひとりのお客様、一杯のコーヒー、そしてひとつのコミュニティから」というミッションステートメントのもと、地域社会とのつながりを大切に、大成功した。

しかし二〇二四年、効率化の過程で顧客との接点が希薄化し、その年の決算では、米国の既存店売上高が六％減少、取引数は一〇％減少した。効率化を優先するあまり、顧客との対話やコンセプトである「第三の場所」としての役割を損ない、経済価値の減退を招いたことは、人間的交流に基づく「共鳴資本」の意義を裏付ける事例である。これらの事例の共通点は、時間をかけて価値を熟成させる制度であり、長期的に「共鳴資本」として人間と社会の持続可能性を高めるということである。効率偏重社会の限界を認識し、「数字に表れない豊かさ」を重視した制度設計こそ、現代の加速社会で求められることだ。

4・3 二〇五〇年への制度設計

最後に二〇五〇年を見据えるならば、「共鳴資本」を中核に据えた社会制度の再設計をする必要がある。教育では、テストの点数や学習到達度だけでなく、生徒同士や教師との「共鳴の質」を評価するカリキュラムを導入すべきである。協働学習や創造的対話の中で生まれる発見や感動を可視化し、それを成績と並ぶ価値として扱う仕組みだ。福祉や医療においても、単なる効率やコス

ト削減ではなく、高齢者や患者との「対話の質」が制度的に評価され、介護者の仕事に「数字に表れない豊かさ」として報酬や社会的信用につながるようにしていくのが理想である。経済では、二〇五〇年の企業は、利益や株価だけでなく顧客・従業員・地域社会との「共感する深さ」を価値として計測するだろう。社員がどれだけ働きがいを感じ、地域との交流からどれだけ新しいアイデアが生まれたかを「共鳴資本」として可視化し、企業価値の一部とする。株主への報告書には財務指標だけでなく「共鳴指数」が記載され、投資家もまた「数字に表れない豊かさ」を基準に企業を評価する社会が到来する。効率至上主義は短期的には成果を生むかもしれない。だが、心身や社会の持続可能性を破壊してきたという紛れもない事実が存在する。これに目を背けず、深さや「共鳴資本」を基準に社会を設計することこそ、未来の生存戦略である。そして、人間にとって「数字に表れない豊かさ」の価値を守ることが、最も重要な国際問題となるのだ。

5章 おわりに

この考えに確信を持ったきっかけは、私自身の生活からだった。私は現在、親元を

離れサッカーの強豪校の寮で仲間と共に暮らしている。朝はまだ薄暗い中、目を覚まし、登校前から筋力トレーニングや寮の掃除、食事などの朝のルーティンをこなす。毎日のハードな練習、ミーティングなどに加え、週末は遠征や公式戦が続く、寮内は常に規律と緊張と熱気に包まれている。仲間は同時にライバルであり、一瞬の遅れも評価に影響する。そんな日々の中、私は「速度」の渦の中にいると実感している。

しかし、不思議なことに心に残るのは、競争の最中にふと訪れる静かな瞬間だ。例えば、夜の食堂で交わす何気ない会話。練習後、グラウンドに沈む夕陽をただ眺める時間。そこには勝敗も評価も介在しない「間」がある。それは肉体と精神を回復させるだけでなく、仲間を深く理解し、信頼を育てる呼吸のような存在だ。スポーツの世界は、常に危険と隣り合わせだ。練習時間を増やせば一時的に成果は出るかもしれない。しかし、「間」を削り続けられ、やがて選手は疲弊し、判断力を失い、長期的な成長が損なわれる。休息や仲間との雑談は、一見「非効率」に見えるが、むしろ持続的に高いパフォーマンスを維持するため不可欠な要素だったのだ。激しい日々の

練習と厳しい規律の中での寮生活での経験は、私にそれを体感させた。

私はこの「間の哲学」を、スポーツや学問に留めず、社会全体に広げたいと考える。組織や個人が常に最高速度で動き続けることは不可能だ。意図的に速度を落とし、熟考や沈黙を受け入れる時間を持つことで、次の一歩はより深く、より確実になるだろう。成長とは単なる加速の総和ではなく、加速と減速のリズムから生まれるものなのだ。

二〇五〇年、私は、現代の加速社会に抗い、無駄と見なされる時間を贈り合い、沈黙のある会話を楽しみ、時間の贅沢を味わう。それこそが「加速」に抗う方法であり、倫理的遅延主義、すなわち加速社会に抗して、立ち止まり、熟考し、自分の速度で生きることを肯定する倫理的態度だ。

変わらぬものは、進めなかった者たちの敗北ではない。それは、進まなかった者たちの「抵抗」である。そして私はこれを「倫理」と呼び、その論理を、二〇五〇年の国際社会に投げかける。二〇五〇年、私はただ自分の歩調で生きるのではなく、国際社会において「間」を尊重する文化を広げる架け橋になりたい。教育や福祉・医療、経済の現場に限らず、全ての領域で、世界で、

立ち止まることの価値を伝え、効率では測れない信頼や感謝、共感すなわち「数値には表れない豊かさ」の価値を紡ぐ役割を担いたい。加速を疑い、熟成を尊ぶ態度を実践することこそ、私達の世代が未来に遺すべき最大の贈り物である。

あのバナナのように——外見の輝きの裏で静かに崩れていく存在として、私たちは外側の光だけで自分を測るのではなく、時間をかけて熟す価値を大切にしたい。加速された未来の中で、あえて立ち止まることが、最も人間らしい選択となる。二〇五〇年、私はどんな「間」を生き、どんな甘味を手に入れるのか——その答えを、未来に向けて選び続けたい。

〈参考文献〉

1. American Psychological Association『Health advisory on social media use in adolescence』二〇二三年
<https://www.apa.org/topics/social-media-internet/health-advisory-adolescent-social-media-use>
2. Hartmut Rosa『Resonance: A Sociology of Our Relationship to the World』Polity 二〇一九年
3. OECD『OECD Compendium of Productivity Indicators 2025』
https://www.oecd.org/en/publications/oecd-compendium-of-productivity-indicators-2025_b024d9e1-en.html
4. SDSN『World Happiness Report 2024』
<https://www.worldhappiness.report/ed/2024/>
5. ウィトゲンシュタイン『哲学探究』講談社、二〇二〇年
6. エドワード・P・トムスン『インテラン・ド労働者階級の形成』青弓社、二〇〇三年
7. 角田泰隆『道元「正法眼蔵」を読む』角川ソフィア文庫、二〇二四年
8. カント『永遠平和のために』岩波書店、一九八五年
9. 国連環境計画『Global E-waste Monitor 2020』二〇二〇年
https://ewastemonitor.info/wp-content/uploads/2020/11/GEM_2020_def_july1_low.pdf
10. 世界保健機関『Global Health Estimates』二〇二一年
<https://www.who.int/data/global-health-estimates>

11. 間 淵泰尚「学習者から見た『ゆとり教育』に対する評価」神戸親和女子大学児童教育学研究 第三八号、二〇一九年

12. マルティン・ハイデッガー『存在と時間（上）』ちくま学芸文庫、一九九四年